自然とともに

やまなし自然保育
活動事例集

目次 CONTENTS

山梨県子育て支援局長
あいさつ ……03

東京大学名誉教授
汐見 稔幸さんに聞く ……04

やまなし自然保育
活動事例紹介 ……07

01 子どもたちの身近にある自然
～園庭での活動～ ……08

02 土が好き。は、人の本能
～稲作、田んぼでの活動～ ……12

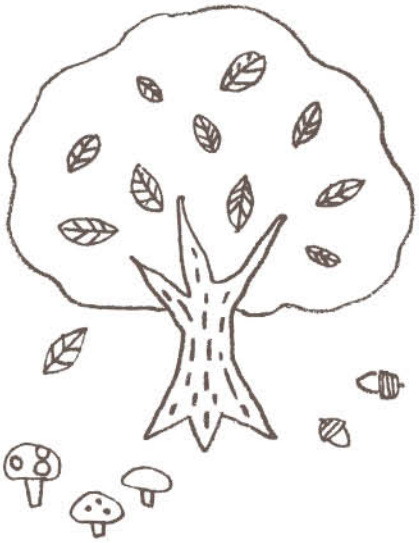
03 自然とアートが融合したとき
～地域資源を活用した活動～ ……16

04 雨の日だって良い天気！
～森林公園での活動～ ……20

05 大学生と一緒に過ごす森での大切な時間
～ふれあいの森での活動～ ……24

06 この地で「生きる」を知る
～裏山での活動～ ……28

表紙写真：小西貴士『みてみて！』(福音館書店)より



山梨県子育て支援局長
依田 誠二 氏

山梨県は、富士山をはじめ、南アルプスといった日本を代表する名峰に囲まれ、これらを源とする河川や湖沼、森林、渓谷、高原など、豊かな自然環境に恵まれています。

幼児期という人生の初期の段階でこうした自然に触れながら育つことは、社会性や自己肯定感の形成など、その後の「成長の土台」を築く上で、非常に重要であると言われています。

こうした中、議員提案により制定された「やまなし子ども・子育て支援条例」が平成29年10月に施行されましたが、この条例においても、本県の豊かな自然環境を生かしながら、子どもに自然と触れ合う機会を提供するために必要な施策を推進していくこととされました。

このため、県では、条例の理念の具体化に着手することとし、平成29年12月に県内の保育所、幼稚園、認定こども園にアンケートを実施したところです。

その結果、「安全性の確保が心配」、「職員にノウハウがない」といった声が寄せられ、活動を行う上での課題が明らかになったことから、県では、平成30年6月、有識者や保育・教育関係者、自然保育の実践者等による検討会を設置し、これらの課題への対応や今後の事業の方向性を検討した上で、平成30年度末に、自然保育に安全に取り組むための「やまなし自然保育導入支援の手引き」を作成し、県内全ての保育所や幼稚園、認定こども園に配布させていただきました。

さらに、令和元年度からは、「自然保育導入推進アドバイザー派遣」の実施や「やまなし自然保育シンポジウム」の開催、「山梨県自然保育活動表彰」を創設するなど、県内の保育所や幼稚園、認定こども園、森のようちえんに、より一層、自然保育に取り組んでいただけるよう強力に事業を推進しています。

「やまなし自然保育」とは、本県の豊かな自然や地域資源を活用した体験活動を取り入れる保育や幼児教育と定義しており、森林や野山等のフィールドを活用した活動はもちろん、園庭や公園などの身近な自然を活用した活動や、地域の伝統や文化、農業、林業等の作業等と、それらに関わる人々を地域資源として捉え、それらを活用した活動まで含むものとしています。

この事例集では、県内で既に積極的に自然や地域資源を活用し、この「やまなし自然保育」に取り組んでいる保育所、幼稚園、認定こども園、森のようちえんの活動内容をご紹介させていただきました。

未来を担う子どもたちが、山梨県の豊かな自然や地域資源を活用した体験の機会を通じ、自らを大切に思う気持ちや他者を思いやる心を養い、そして郷土愛を育みながら健やかに成長していけるよう、多くの皆様にこの事例集を活用していただき、自然保育に取り組んでいただければ幸いです。

東京大学名誉教授
汐見稔幸さんに聞く

今、なぜ子どもたちに、自然体験活動が大切になっているのか

保育・幼児教育の第一人者である東京大学名誉教授の汐見稔幸教授。山梨に残る豊かな自然の資源を活かすこと、自然の中で活動することで見える多くの可能性があります。今回は、「今、なぜ子どもたちに、自然体験活動が大切になっているのか」について、丁寧にお話をお聞きしました。

生の自然と離れつつある現代社会

現代社会の特徴を一言でどう表現できるでしょうか。色々特徴づけることは可能でしょうが、子どもを育てるという営みの側からいうと、人間が生（なま）の自然に直接かかわって、そこで生活の仕方を工夫したり、そこから何かをつくったりという関係性が、どんどんなくなってきたということが大事と思います。

私が若い頃は世の中にクーラーというものがなかったので、夏の暑さしのぎは知恵比べのようなものでした。冷蔵庫もない家が多く、食べ物の保存には工夫が必要でした。魚を焼くときも、うちわを使って七輪で炭火を調整しながら焼きました。遊ぶ場所も道ばた、原っぱ、河原、雑木林などが主で、そこにある自然の素材を使って遊ぶしかありませんでした。使うべきは「頭」で、考えて工夫しないと遊べなかったのです。

その頃は、子どもの前には、子ども自身もどうしてだろうとか、どうすればいいかを考えられる「身の丈に合った世界」がたくさんありました。たとえば井戸の水をくみ上げるポンプ。どうして押すと水が上がるんだろう、と不思議に思って調べることはまだ可能でした。でも今のように手をかざすと蛇口から自動的に水が出てくるような現

実に出くわしても、子どもはどうしてだろうと思って調べることは多分しないでしょう。仕組みが子どものどうしてだろう好奇心のレベルを超えてしまっているからです

つまりいろいろな意味で、生（なま）の自然から離れつつあるのが、現代文明の最大の特徴なのです。バーチャルリアリティVRの技術が進歩すれば、居間にいながら海で泳いだり、森を散歩している感じを味わうことも可能になるでしょう。放っておくと、生の自然は外にある単なる「もの」、風景に次第になっていく可能性があります。

外なる自然と内なる自然

ところで、人間の外側にある自然のもろもろは、人間のうち側にある自然（つまり生物としての人間のあらゆる側面）とどう関係しているのでしょうか。

NHKがかつてテレビで面白い実験をしました。大学の運動部の学生たちを①渋谷駅前の人混みの中で、心拍数があるレベルになるまで自転車をこいでもらいます。そのまま、何分で元の心拍数に戻るかを調べます。同じ学生たちを今度は②茨城県の筑波山中に連れて行き、樹木に囲まれた静かな環境で同じように自転車をこいでもらい何分で元の心拍数に戻るか実験をします。

結果は驚くべきものでした。筑波山中で実験したときは、渋谷駅前で実験したときの約3分の1の時間で元の心拍数に戻ったのです。

この実験では理由は分かりません。確か森林浴の効果を考える番組だったと思いますが、考えられるのは、心理的効果以外に、樹木が自らを守るために出している木精（フィトンチッド等）が、人間の疲労素例えば乳酸の分解を助けたことなどでしょうが、正確には分かりません。ただ事実としてそういうことがあるのです。

最近の研究では、人間には皮膚、内臓、性器等に無数の細菌が人間と共存・共生する形で存在していて、とくに腸内細菌はその働きが人間の健康と深くかかわっていることが分かってきました。腸内細菌だけでも人の細胞数86兆個の十数倍の10000兆個もいるというのです。日本人が長生きなのも、日本人の多くがもっている腸内細菌の働きと関係しているらしいことが分かってきましたし、糖尿病、高血圧、そして発達障害といわれる特徴なども、腸内細菌の活動やバランスのあり方とも関係している等のことが分かってきたそうです。これらの細菌は生まれたときは子どもの中にいなくて、生後に外の自然から手に入れるものですが、この面からいうと、外の自然は人の中に入り込み、内なる自然としても見事に活動していることになります。

それだけでなく、外なる自然は人間の内なる自然のあり方と深く結びついています。重力のない宇宙ステーションで活動している人は、地球に戻ってから重力に慣れるまで病院で暮らさねばなりません。人間は、重力に抗する形でのみ生育し存在してきましたので、重力がなくなると、正常な生理的機能が損なわれるからです。人は、重力という自然の働きの中で、それに抗しつつ自分になっていくのです。同じように曜日に象徴されている自然の要素、日月火水木金土との交渉を通じてのみ、人間の中の自然性は育っていきます。人間には自然が不可欠なのです。

人は自然と共生している

子どもにとって、どうして自然そのものや自然の中での活動が大事なのか、ということには、これまで見てきたこと以外にも、多様な理由があります。

たとえば5感の活性化ということも深く関係しています。テレビやネットの動画で紛争地のテロの様子をみて何かを感じるとき、私たちは主として視覚と聴覚を使って情報を処理しています。そしてひどいなあ、残酷だなあ等と感じるのですが、それで実際のテロのことが分かったことになるのかどうか、疑問です。

実際の現場では、火薬の匂い、ロケットや銃の突き刺すような音、必死で逃げ惑う女性や子どもの叫び、がれきの山とすさまじい埃、その臭い、死体から漂ってくる言葉にできないような死臭…こういう情景が目の前にあるのです。とくに嗅覚が処理する情報の印象は強烈です。テレビにはそれがない。

現代の情報社会では、視覚情報と聴覚情報はデジタル情報に分解して、送信し、再現することが可能で、どんどん細かくできるようになっています。バーチャルな情報さえつくれます。しかし臭覚情報等はデジタル情報に分解できないのです。そのため、肌で感触を感じる、臭いですさまじさを感じる、味で体に残る印象を感じる、等の視覚・聴覚以外での情報処理はデジタル社会では今はできません。現代は、結果として極端な視覚・聴覚優位社会になっているのですが、それだけだと、世界の実際の姿、本当のところ、は実はあまり分からないのです。

外的な自然と直接かかわること、自然を直接活用することは、多様な感覚器官を活性化し、身体全体で世界を知るという人間力の育成に貢献します。そうなれば、人は外的な自然と共生しているという感覚を感じる機会がうんと拡大する可能性があります。

それ以外にも、外的な自然は、ある意味、教材の宝庫ということがあります。木片、枝、葉っぱ、石、水、土、そして虫、草、花等々に、興味関心が湧きさえすれば、自分が生きているこの世界が、不思議に満ちていること、冬でも生物が生きていて、工夫して越冬していること、そのための仕組みがいろいろあること、つまり子どもたちの科学的探求の対象に様々になり得ること、そして利用次第で自然素材が豊かなアートの素材になること、も大事でしょう。

もっともっと、自然の資源を活かすこと、自然の中で活動することには、身体能力の育成など人間形成上の意義はたくさんあります。

このことが大事になっているのは、はじめに述べたように、現代社会では人間が、どんどん生の自然から離れ、遠ざかっているからです。

人間は自身が自然の一つであり、外的な自然から様々なものをいただかない限り生きていけない存在です。にもかかわらず、外的自然と共生している自身のあり方が実感できなくなっていて、それが環境破壊等を生み出す原因になっています。自然と豊かにかかわることは、その意味で人間の中の自然性を活性化する営みと総称できるでしょう。

Shiomi toshiyuki

Profile 汐見 稔幸氏

しおみ としゆき

東京大学名誉教授・日本保育学会会長・白梅学園大学名誉学長・全国保育士養成協議会会長・一般社団法人家族・保育デザイン研究所代表理事。

1947年 大阪府生まれ。東京大学教育学部卒、同大学院博士課程修了。

やまなし自然保育活動事例紹介

01. 園庭での活動

02. 稲作、田んぼでの活動

03. 地域資源を活用した活動

04. 森林公園での活動

05. ふれあいの森での活動

06. 裏山での活動

01

子どもたちの身近にある自然

園庭での活動

「虫さ～ん？どこですか～？」「ここにいるのかな？」。2月なのに20度を超える暖かさになるでしょう…というニュースを耳にしたある日の朝、いつものように園庭で過ごしていた2歳児の子どもが発した言葉です。暦の上では1年で一番寒いとされる時期にも関わらず、優しく吹く風が肌に触れる感触や土を触った時に感じる手の温もりの中に、この子はきっと春の訪れを感じたのでしょう。甲府市の住宅街にあるかほるこども園。本園には、日常にある自然との対話を楽しむ子どもたちが集まります。

日常にある自然って？

かつてかほるこども園は、黒板の前に先生が立ち、ひらがなを学んだり、子どもたちが一生懸命習得したマーチングを運動会で披露するといった、いわゆる一斉保育を積極的に取り入れていた園です。子どもたちと毎日同じ時間を過ごせば過ごすほど、いつの日からか疑問や葛藤と戦う日々が増えたことを今でも覚えています。ある時、1人の先生が退職することになりました。最後に先生から園に何かプレゼントをしたいという相談をいただき、〝園庭に一本の木を植えてみたい〟とお願いしたのです。大人になり保育者となった私たちが、まだ小さかった頃、自宅の庭には大きな木があって、花が咲く様子を眺めたり、実を捥いでみたり、木登りを楽しんだりしていたことを思い出し、なんとなく木を植えてみたくなったのです。身近に自然を感じた幼い頃の思い出は、ふとした時に蘇るものだなと感じた瞬間でもありました。こうして、本園にやってきた「ユズリハ」は、園庭の真ん中に植えました。

1.園庭には、様々な種類の木を植えています。春は花の咲く様子を眺め、夏には木陰で涼み、秋になると落ち葉を穿く子どもたちの姿が見られます。2.自然物を使った創作活動も日常的に行われています 3.日々生活する園庭の中で、季節の移ろいを感じながら安全に活動できるのが魅力。

一本の木が教えてくれたこと

「ユズリハ」は、春先の新芽と蕾が表現する、黄緑と赤のコントラストが美しい常緑高木。平坦な地面を囲むように用意された遊具が主役の園庭を優しく包み込み、なんとも心地よい感情が芽生えたのは私たち大人だけではなかったようです。身近に在る自然環境が、子どもたちに与える影響は計り知れないであろうと確信した本園は、園庭改造計画に踏み込みました。花の咲く木、葉の落ちる木、実をつける木など様々な木を園庭に植えて、井戸を掘り、そこに水を流し、異なる3種類の砂を楽しめる砂場を設置して、平坦な地面を敢えてデコボコに作り替えました。今ではその他に、子どもたちの発案でメダカの飼育や野菜、果物なども園庭で育てています。

もう何年も前になりますが、こんな出来事がありました。子どもたちとの話の中で、園庭の絵を描こうということになり、各々好きな場所で好きなものを描く時間がありました。その中の何人かが、あの「ユズリハ」を描くことになったのです。スケッチブックいっぱいに大きく描く子や、繊細なタッチで描く子など様々。最後に絵を見せてもらった中に、あの木の幹をグレーで描いた年中児の男の子がいたのです。正直、ハッとしました。この子は毎日の活動の中で、木を観察し、木との対話を繰り返していたのでしょう。木の色を茶色と決めつけて教えていたのは、大人である私たちだったと気づかされ恥ずかしくなりました。

1人の人間として信じる

子どもたちの自然保育には、保護者の理解が必要不可欠です。本園では、朝登園すると、10時頃に一度クラス毎のミーティングが行われます。ミーティングをする場所も子どもたち自身で決めて伝達するため、年長児のミーティングに2歳児が混ざることも珍しい光景ではありません。そこで、本日の活動を各々擦り合わせ、自身の目的を伝えると同時に、仲間の行動を把握します。その後、自由時間はお昼まで続き、昼食後の活動も子どもたちが決めます。園庭で見つけた、様々なカタチの容器に井戸で水を汲み続ける1歳児、砂場を工事現場に見立て一生懸命働く男の子チーム、園庭の木に濡れた上着や靴下を干す子など、驚くことにこの小さな園庭の中で、社会の日常を見ることができるのです。一日の大半が遊びの時間である本園ですが、物を雑に扱ったり、生命について無知な子はいません。冬に水遊びを派手にする子もいません。それは、子どもたちが自然との対話を繰り返す中で、学び知っているからなのです。何が育っているの？と問われたら、それは私たちにも分かりません。そんな簡単に分かるはずもないと思っています。しかし、大人と子どもという枠組みなんて関係なく、この園に関わる全ての大人が子どもたちの力の素晴らしさに気づき、そしてそのことを真剣に信じていることは確かと言えるでしょう。

INFORMATION

かほるこども園

カホルコドモエン

園庭の自然資源の活用について 小西 貴士さんに聞く

保育園や幼稚園やこども園に通う子どもにとって、日中の時間の多くを過ごす園舎周辺の環境は、家庭のまわりの環境と同じかそれ以上に、育ちにとってたいせつな環境と言えます。ひと昔前は多かった、いわゆる運動場のような平面のスペースと、その周りを囲む遊具といった環境が、今全国的に変化しています。それはなぜでしょうか？今のかほるこども園の姿に、その答えがあるように思います。ユズリハを一本植えるところから始まった園庭改造。ある男の子がその幹をグレーで描いたことは、樹皮をよく観察してみると当たり前かもしれません。しかし、保育者の中で木の幹を描くときに茶色を用いることが多くなってなかった？という小さな内省をちゃんとたいせつにして、子どもが対象とどう出会い、どう感じ、どう表現しているのかを、育ちの姿としてとらえ、その姿をベースに保育を進めてゆこうよ、という流れとなっていったことに大きな意味があります。それには、子ども自らが興味関心を示すようなモノやコトが豊かにある環境が重要になってくるということです。園庭が園児の動きを把握しやすいことや、ある限られた活動のためだけに用意された場ではなく、子ども自らが興味関心を示して活動に取り組む場なのだと考えた時、自ずと園庭はデコボコとし、水が流れ、果樹や野菜が実るように変化していったのだと思います。また、草や木や虫といった生命、水の流れといった現象は、消費財である玩具とは違い、人の都合に沿ってできているわけではありません。ですから、子どもがやりたい放題やればいいわけではないでしょう。きっと、そこには仲間との対話や、保育者との対話も豊かに生まれるはずです。地球規模で考え行動できる人の乳幼児期の学びとして、ごく身近な園庭という環境で、主体的で対話的で深い学びが行われるにはどのような園庭の姿であればいいだろうという実践が、かほるこども園の園庭の姿に見ることができると思います。

Expert 01

Profile

小西 貴士さん

こにし たかし

森の案内人（インタープリター）であり写真家。山梨大学・大妻女子大学・聖心女子大学で、講師として保育や教育と生命や生態系をつなぐ授業を担当する。著書に『子どもと森へ出かけてみれば』（フレーベル館）等多数。

02

土が好き。は、人の本能

稲作、田んぼでの活動

甲府昭和ICの近くを走るアルプス通り。その北側に面する「かおり幼稚園」は、車の喧騒から一変、静かな田園地帯にある認定こども園で、現在は276名の園児が毎朝、元気に登園してきます。昭和51年の開園当初から、さまざまな体験を通して成長してほしいという教育指針で運営。そのひとつに田んぼでの活動があり、一年を通して稲作体験や野菜づくりなどを行っています。土に触れること、食べ物を育てること、生き物に出会うことで子どもたちが得られることはなにか。田んぼをフィールドにした活動をご紹介します。

恵まれた環境を活かす

園舎があるこの辺り一帯は、昔から稲作が盛んで、今でも田んぼに囲まれたのどかな田園風景が広がる地域です。前園長である理事長が、管理教育に疑問を感じ「人の根っこを育てる大切な時期である幼少期に、自然に親しむ実体験を通して自由な精神を育みたい」と開園したように、現在も田んぼでの活動に重点を置いています。幼稚園を開園する前は、農業をしていた経緯もあり、昭和51年の開園当初から田んぼを所有していました。今でも、農業から離れる高齢者の方から「ぜひ子どもたちのために田んぼを使ってほしい」と申し入れがあるほど環境に恵まれています。借用しているものも含めて、およそ600坪の田んぼと園庭では、春には草花や若葉、夏には昆虫、秋にはドングリや紅葉、冬には落ち葉と四季の移ろいを感じながら、子どもたちは、自分が置かれた状況に柔軟に対応し、自由に過ごしています。

田んぼは園舎に隣接しているため、子どもたちは私たちが畑を耕す作業を見つめたり、住んでいる虫や生えている植物を観察したり、植えた苗の成長も常に見られる環境です。それに加え、プランターに入れ替え、園庭等に置くことで、より子どもたちに興味を抱くような見せ方にも工夫しています。収穫した野菜を持ち帰ることはもちろん、つくり過ぎてしまったものに関しては、青空市場と称して、保護者に格安で販売をします。安価なうえに、薬を極力使用していないため安全であり、なによりも子どもたちがつくった野菜ということに、大変喜ばれています。

1.農家でも最近はトラクターを使い稲刈りを行いますが、当園ではカマを使い手作業で行います。年中時に年長児の稲刈りを見学しているので、やっと自分たちの出番！と首を長くして待っていた子どもたちばかり。2.土を入れた苗箱に種もみをまき、苗が育つまで約1ケ月ほど待ちます。大人でも種もみの経験がない人がほとんど。子どもたちが知らず知らずに植物や食べ物のしくみを知っていきます。

実体験を通し、感覚を植え付ける

稲作体験は、田植えだけ、稲刈りだけという単なるイベント的な体験とは一線を引き、一から行います。5月、種もみから始め、苗を育てます。6月に入ると年長組が田植えを行います。水を張った田んぼでは、おたまじゃくしやメダカ、蝶々、蛾、カエルなどの生き物（園庭のビオトープにもメダカ）がいますが、虫を怖がる子どもはほとんどいません。むしろ、畑作業しているかと思えば虫を両手いっぱいに集めたり、土でおだんごをつくったりして、泥だらけになって楽しんでいる子どもばかり。稲刈りでは、カマを片手にスムーズに刈る子もいますし、野菜の収穫では、よいしょと引いた先に現れたじゃがいもに驚く子、園庭に生い茂る桜、椿、くぬぎ、しだれやなぎ、トチノキなどの木の下では、草花を使っておままごとをする微笑ましい光景が見られます。

収穫後は、3つの大きな釜を使い、お米を炊き、子どもたちでおにぎりを握ります。「お米がぷにぷにして気持ちが良かった」と握った感覚や、「ふわふわで美味しかった」「お米がキラキラしていた」と食べた感想を話す子、「お米を育てることって大変だ」「お米を大事にしたいな」と食に対する意識が芽生えた子もいます。そして、「お米や野菜には命があるんだね」「みんなで育てることができてよかった」と、命の尊さを感じたり、友達と一緒になってつくることで協調性が生まれた子もいます。野菜を持ち帰り、その食材を使って料理することで、「○○くんのつくった野菜はおいしいね」「○○ちゃんがつくったの？すごいね」と、家族に褒められたことで自己肯定感が高まり、視野を広げることができるようです。

この経験はいつかきっと役立つ

田んぼの生き物の生態系、子どもたちより背丈が大きくなる稲穂、花を咲かせ実を付けた野菜。田んぼの中の小さな世界は、子どもたちに想像を膨らませることができます。その想像は、本園で力を入れている絵画にも発揮しています。「大根を抜いたんだよ」と、自分より大きい大根を描く子、採れたスイカの皮を筆代わりにする子もいます。まだ語彙力が乏しい子どもたちは、心で感じたことを言葉より絵として具体的に表現します。その表現力は大人の感覚にはないもの。

子どもの頃に体験した小さな経験は、いくつになっても思い出として残ります。それは、遊びを通して培われたものの方がより強烈に残っていると聞きます。卒園した子どもの中には、「お米の成長を知っているのは私だけだった」「田んぼの活動が試験に役立った」「時間が空いたので家庭菜園をやっている」と嬉しい話も聞きます。土に触れた体験は、いつまでも子どもたちの心に植え付いているのでしょう。

INFORMATION

認定こども園 かおり幼稚園
カオリヨウチエン

稲作、田んぼでの活動について大野 歩さんに聞く

稲作が盛んな地の利を生かし、稲作体験を中心とした自然に親しむ実体験を幼児に育まんと尽力されているのが、本事例で紹介されたかおり幼稚園である。子どもたちは、園の保育経験を通じて、「今、この時」、自分の中に芽生え、むくむくと頭をもたげつつあるものを様々な形で表現している。

日本語がコメにまつわる言葉を豊富に有する背景には、日本人がコメの成長に寄り添い、あらゆる場面でコメと深くかかわってきた生活文化の存在があるとされる。その通説を知ってか知らずか。かおり幼稚園の子どもたちは、園の活動の中で「にぎり飯」という、ある一つのコメの調理形態と出会った際に、触感、軟度、艶を独自のオノマトペで表した。それら表現で語られた「にぎり飯」は、ただの「にぎり飯」ではない。子どもたちが自分の手で種籾を選別し、苗床に撒き育て、田に水を張って整地し、育った小さな苗を植え、緑色から黄金色へと徐々に変化する稲の育ちを見守り、実った稲穂を落とさないよう根元に手を添えて刈り取ったコメで作ったものである。自分たちが手塩をかけ育てたコメが、自分たちの体内へ入って自分たちを育てるものへと転換する。そのあわいに立ち、その場でコメが発する様態をとらえた子どもたちだからこそ、そのコメを「ぷにぷに」「ふわふわ」「キラキラ」であると語るのだ。これほど豊かな知性と感性の育ちがあろうか。「環境を通じた学び」「伝統文化の継承」「食育」などと大人が発する言葉を圧倒的に凌駕する、子どもたちの身体を通じて発せられた言葉の持つ重みと現実味、そして煌めきを感ぜずにはいられない。

本園で育まれた子どもたちの経験は、個々が手応えをもって得た唯一無二の財産として蓄えられ、この先を生き抜いていく原動力になっていくだろう。この子たちが投げかけてくれる未来への期待を抱きつつ、かおり幼稚園の先生方と共に、彼・彼女らの育ちをゆっくり見つめていきたいと思うのである。

Expert 02

Profile

大野 歩さん

おおの あゆみ

山梨大学教育学部准教授。博士（教育学）。専門は保育学、幼児教育学。スウェーデンの保育政策や保育実践を調査研究しつつ、日本における子どもの観察・記録を通じた質的な保育評価の実践研究を進めている。

自然とアートが融合したとき

03

地域資源を活用した活動

1971年「やさしく、たくましく、感性豊かな、賢い子どもを育む」ことを教育目標に掲げ、甲府西幼稚園は歩み出しました。当初から、子どもたちの発見や気づきを、感動や自身へのことに結びつけて、学ぶ意欲や生きる力に繋げられるような教育活動に取り組んできた本園。その中でも、山梨に残る豊かな自然から教えてもらうことは数え切れません。ここでは、「本当に大切なことって、目に見えないんだよね？！」そんなことに気づかされた甲府西幼稚園の自然体験活動ストーリーをご紹介します。

森の中で絵を描いてみたら面白そうじゃない？

年中児の3学期から始まる甲府西幼稚園の自然体験活動。春、同市羽黒町にある「武田の杜」へ初めての里山体験に出掛けます。公園で遊ぶつもりで出発した子どもたちの中には、遊具の無い空間に〝この場所でどうやって遊んだらいいの〟と戸惑ってしまう子も少なくありません。それでも「自由」という時間をどう過ごすのか、子どもたち1人ひとりが自らの力で考える姿が見られる貴重な瞬間。

春が終わり、里山に夏が近づく頃、再び同じ場所「武田の杜」を訪れるのが本園の恒例行事です。雨がザーザー降っていない限り、年長児全員が武田の杜へ向かいます。木登りにチャレンジする子、葉っぱでおままごとを楽しむチーム、水の中を覗き込んでおたまじゃくしを観察する子どもたち、など…。いつもとは違うフィールドで各々の時間を思い切り楽しむのです。

年長児になると、春と夏の里山体験に加えて、北杜市清里にある清泉寮自然学校での夏のお泊り保育と園最後のお別れ遠足で、より質の高い自然体験活動を経験します。そんないくつかの自然体験活動の中から2019年に生まれたのが、日々子どもたちと過ごしている担任と目の前にいる子どもたちに合った自然活動を考案した、〝森の中で絵の具遊びをしたら面白そうじゃない？〟という企画でした。

1.森の中での創作活動は、子どもたちの頼もしい表情に出会える貴重な時間。年長児になると、何もない森に戸惑う子どもの姿はありません。2.県内で活躍するアーティストと過ごす「アトリエ教室」。歌を歌ったり、絵を描いたりして、目の前にいる子どもたちに合わせた時間を過ごしています。

自然体験 × アトリエ教室

自然体験活動と同じように本園が大切にしていることの一つに、県内で活動している、音楽や芸術のスペシャリストをお招きして、子どもたちとの関わりを2年間通して行うプロジェクト「アトリエ教室」があります。このアトリエ教室を自然体験活動と融合させ楽しんだのが2019年でした。

年中児から始まるアトリエ教室の活動を通じて、その学年に合うスタイルを年長児に進級する頃に見つけ、子どもたちと共に一つのものを完成される甲府西幼稚園。今まで、教室や園庭でしかやったことのなかった創作活動を、森の中でやってみた初めての体験でした。

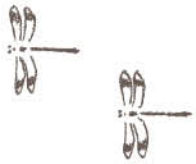
感じたことを言葉にできること

年長の夏にお泊り保育で訪れた清泉寮自然学校で実施した「自然体験×アトリエ教室」。初日に入った森の中で、約10メートルもある大きな白い布を皆で広げました。その上に何色もの絵の具を散りばめて、自由時間のスタートです。子どもたちは、森の中にある木の枝や葉っぱを掴んできて、それを筆代わりに大きな布のキャンバスを思いおもいの色に染めていきます。

「こんなに大きな枝を取ってきたよ！」、「私の枝と交換してあげようか？」、「青でいっぱい塗ったら海みたいになったね」、「少し離れて見てみると、青だけじゃなくて色々な色がある絵なんだね」、「赤色がいっぱいでマグマみたいだね」など、1人ひとりが今感じていることを言葉として口に出す姿に驚かされました。アトリエ教室の先生が、その時間子どもたちが発した言葉一つひとつを丁寧に拾い集めて、オリジナルソング「空と星のジャングル」を制作してくれたのです。自身の発した言葉がチラリと姿をのぞかせるその曲に、子どもたちは今までにない感情が芽生えた様子。

数日後園での活動の最中、森の中で描いた絵を広げてみることにしました。「こんなに大きな絵だったんだね」や「海だと思っていたけれど夜の空にも見えてきたね」など、まるで初めてその絵に触れるような新たな感動と発見があった時間となりました。

甲府西幼稚園の自然体験活動。豊富にある県内の森林公園という地域資源と五感を刺激するような地域に根付く人材を融合した体験を通じて、「上手に絵がかけてよかったね」という言葉をかけた先生はもちろん1人もいません。もっともっと違う視点で、「自身が思っていること、感じたことを言葉にできた」喜びに成長を感じ、大人である先生たちにとっても、多くのこと学ぶ確かな結果を残した活動でした。



INFORMATION

認定こども園 甲府西幼稚園
コウフニシヨウチエン

地域資源を活用した活動について 伊藤 美輝さんに聞く

「本当に大切なことって、目に見えないんだよね?!」と言うことから始まる甲府西幼稚園のストーリー。私の専門とする「表現」の観点から考えてみたいと思います。多くの皆さんは、「表現」は外に現れるものと言う概念を持っているかと思います。絵を描いたり、歌を歌ったり、踊ったり等の表す活動＝表現活動であり、それは他者からも「見える、聞こえる」活動であると考えられています。さて質問です、その表現活動は何を育てるのでしょうか?その活動を行うにあたり、子どもたちと大人の表現をする目的は同じなのでしょうか?

表現のプロセスを考えてみると、InputとOutputの方向性を持つプロセスが存在します。そのプロセスで重要な役割をしているものが、「見る・聞く・触る・嗅ぐ・味わう」の五感です。これが、二つの方向性のゲートになっています。そして、乳幼児期はその五感が育つ、大切な時期です。もう一つ大切な視点として、私たちの行為全ては表現であると言う観点です。日々の生活の中での「行為」に表現の重要な意味が含まれています。子どもの活動は「遊び」であり同時にそれは「学び」である事は、幼児の成長に関わる方であれば、ご理解いただけると思います。即ち、この遊びが、心身の成長を促していきます。

さて、これらのことを甲府西幼稚園の活動に当てはめて考えてみたいと思います。日常の幼稚園の環境内における活動(アートを含めた)と、年に数回行われる「武田の杜」での非日常的(刺激的)な活動と結びついて、Input・Outputのプロセスでの活性化が進んでいることを感じます。この方向のプロセスに何があるかと言うと「感じること考えること」すなわち「感性」の成長と言う重要な要素が含まれています。同時に「五感の成長」という身体的成長が促されます。自然の環境の中で「描く」活動が紹介されていました。つい、描く行為に目が行きますが、そのプロセスにおいて子どもたちの中での成長に目が行くとしたら、大切な事が見えるようになります。そして、五感を育てるゲートを開く役割としての「刺激」が溢れた環境が、山梨には沢山あることが目に見えてきます。

Expert 03

Profile

伊藤 美輝さん

いとう よしてる

愛知県出身 山梨学院短期大学教授。専門分野:造形教育(幼児、学童、障害者)。社会活動:山梨県立美術館「つくろうあそぼう造形広場」企画運営。山梨県立美術館「みんなでつくる美術館展」副実行委員長。山梨・人ねっこアートワーク代表盲重複障害者施設　青い鳥成人寮造形教室講師。南アルプス市立美術館協議会 会長。

04

雨の日だって良い天気!

森林公園での活動

2007年頃からその名をよく耳にするようになった森のようちえん。北欧諸国がその始まりとされ、わが国における森のようちえんとは、自然体験活動を基軸にした子育てや保育、乳児・幼少期教育の総称を指します。本園、「森のようちえん　にっこにこ」がスタートしたのは2008年のこと。甲府市北部の森林公園を主なフィールドとし、園舎を持たない独自のスタイルで、現在26名（2020年2月現在）の子どもたちと過ごしています。ここでは、自然体験活動を実施する中で問われることの多い、雨の日の活動についてお話しながら、本園の中で近年印象に残っている一つの物語をご紹介します。

今日は雨。

本園には園舎がありません。甲府市北部の森林公園「武田の杜」や「創作の森おびな」、「愛宕山こどもの国」を主な活動拠点としながら、その他、借りている田んぼと畑、市外にある森林公園にて日々活動をしています。四季のあるわが国で、雨の日や風の強い日、容赦なく太陽が照りつける日、冷たい雪の日があるのは当たり前のこと。本園の子どもたちは、フード付きのカッパを頭からすっぽりと被り、長靴姿で登園するのが雨の日の基本スタイル。お弁当や水筒、タオルや着替えなどを詰め込んで、日頃からずっしりと重い大きなリュックを背負う子どもたち。この日は、もちろんその大切なリュックにも、しっかりとカバーをかけて集まります。

雨の日だからといって何か特別なことをする訳ではありません。でも、やっぱり子どもたちは雨が大好き！水たまりにバシャバシャ入って遊んでみたり、土や石ころで工夫をしながら水路を作ってそこへ葉っぱを流してみたり、木の枝に溜まった雫を落としてみたり、「どうせ濡れるから池に入ってもおんなじだ～」と言って池に入る子だっています。もちろん中には、「濡れた靴を履きたくない～」と言う子もいるし、「寒いよ～」と泣き出してしまう子もいます。お昼まで約2時間のお散歩を楽しんだ後、大抵は借りている公共の施設を活用して着替えや昼食をとります。午後はそのまま室内で活動をする時もあれば、再び森へ出かける日も…。

大切なのは、皆自然と同じように多様であって良いということ。〝出来る出来ないではなくて、この子はこの子〟。そう見守るのは、広い自然の中で、私たち大人にとってもそう難しいことではありません。

1.真剣な表情で彼女の読む絵本に見入る子どもたち2.子どもたちは、雨の日も元気いっぱい！多様性を感じて、自己・他者肯定をする中で、共生を学んでいます

もう1人の先生

ある1人の女の子が入園してきたのは、彼女が3歳の時でした。彼女は、ダウン症で一つの単語以外お話することが出来ませんが、積極的で明るく、面倒見の良い性格。泣いている子を見るとそっと寄り添い自身のハンカチでその子の涙を拭いてあげたり、お友だちのお弁当を片付けてリュックにしまってあげる姿が日常的に見られる子でした。山での様子も、気まぐれな自分のペースで遊びを見つけて、鬼ごっこや自然物を使った創作活動に目をキラキラさせる子です。帰りの会で、先生が絵本を読むのですが、彼女が自宅から持ってきた絵本を広げて、先生の隣に立ち、同じように「あーうー」と絵本を読むそばで「うん。うん」と真剣に聞く子どもたちとの時間が、彼女が卒園するまでの定番の過ごし方。

卒園を控えた頃、子どもたちが彼女に宛てた手紙を読む機会がありました。そこには、「絵本を読んでくれてありがとう」や「色々と教えてくれてありがとう」などの言葉が綴ってあったのです。子どもたちと長年向き合ってきた私たちが、「コミュニケーション力は、言葉だけではない」とあらためて目の前で気づかされました。この子たちは、日々過ごしている自然の中で、深い信頼関係を築いていたようです。

子どもと自然が持つ力

〝なぜ自然なのか〟。それは、自然は多様であるから。自然には、全人格的要素があり、その全てを包括しているからです。自然が持つ教育力に勝るものはなく、自然の中で思い切り遊ぶことで、探索と没頭がそれぞれの子に保証されています。私たち大人が、子どもたちとの関わりの中で大切にしていることの一つに、空間と時間の確保がありますが、その両方が自然の中では確保しやすいと思います。幼い頃、個々の遊びが充分に満たされていると、やがて集団で楽しむ喜びを知ります。縦割りでの活動は、常に誰かが何処かで輝くことができ、それぞれの子の自信に繋げる場面が作れます。森のようちえんは、活動がハードだと思われがちですが、私たちは、子どもたちが探求する時間や自分の思いを口に出したり、そしてそれを受け止めたりする…ゆったりとした時間を最も大事にし活動しています。日常から続く特別を教えてくれるのは、いつだって子どもたち。豊かな自然の中で、子どもたちも心豊かに大きくなっていきます。

INFORMATION

森のようちえんにっこにこ

モリノヨウチエンニッコニコ

森林公園での活動について 秋山 麻実さんに聞く

自然のなかでは、なぜ子どもの多様性が認めるのが「そう難しいことではない」のでしょうか。そして、多様性を認めることは、なぜ大事なのでしょう。

寒い日に子どもが池に入っていったら、たいていの大人は、黙って見ていられません。大人は、濡れたら寒くなって風邪をひくことを心配してしまうからです。また、通常はその意味で子どもの安全を守るのが、大人の責任と考えられています。園環境を整えるならば、雨の日に池に入りたくなるような環境は作りません。でも、「にっこにこ」の子どもたちは、池のあるところを探索し、入ってしまう体験をするのです。

このことの意味は、単に、一人一人の多様な姿を容認しているということにはとどまりません。子どもたちは、池に入ったら気持ちいいこと、楽しいこと、けれど後から寒くなることを体験から知ります。寒くなったらどんな気持ちになるのか、どうしたらいいのか、次はどうするのかも考えるでしょうし、それらを伝えあって、自分たちの生活の知恵にしていくこともできます。

そもそも子どもたちの育ちと学びとは、世界を自分たちの身体で、頭で、心で探索し、体験し、その意味を作り出していくことです。自然豊かな環境では、状況は日々変化します。そのなかでは、大人が用意したプログラムを達成できるとは限らず、むしろ大人も子どもも新しいことに出会い、対応し、学んでいくのです。

そこで大切なことは、子どもたちが何をしているかを注意深く見ながら、彼らを尊重することです。後半の女の子のエピソードは、「にっこにこ」の保育者が、子どもがどんな風に育っているのかを学んでいることを示しています。

言葉にならない友だちの読み聞かせの声に、自分たちが一緒に楽しむ時間としての意味を与え、自分たちの仲間としてその子の存在を感じ取る。子どもたちはそうして自分たちの生活を楽しいものにし、それに意味や価値を与えるという生き方を学んでいるのです。

Expert 04

Profile

秋山 麻実さん

あきやま あさみ

山梨大学大学院総合研究部教育学域教授。2000年東京大学大学院教育学研究科満期単位取得退学。2001年山梨大学教育学部講師として着任し、2018年より現職。研究テーマは「保育記録と振り返りと評価」および「生と死の教育史」。著書に『はじめての子ども教育原理』（有斐閣）（共著）『5歳児の協同的学びと対話的保育』（ひとなる書房）（共著）などがある。

活動事例紹介

05

大学生と一緒に過ごす森での大切な時間

ふれあいの森での活動

今から50年以上前、昭和42年に本園「東桂保育園」は、市内で一番の後輩園としてスタートしました。開園当初から、子どもたちの安全な食にこだわり、添加物を使わない素材や調味料で、全て手作りする食事やおやつを作り続けています。10年程前からスタートした本園のふれあいの森での自然体験活動。その活動の中でも、自然体験と食を上手に融合させながら、都留文科大学の学生と共に力強く森での時間を過ごしています。

ふれあいの森は、宝の山だった

年間を通じて多少の違いはあるものの、子どもたちは月に何度か本園から約4km離れた「ふれあいの森」へバスに乗って向かいます。今回は年少児、次回は年中児といった具合に、学年毎に活動日は異なりますが、都留文科大学の学生が常に2～4人集まるのが定番の活動風景です。年長児になると、同大学すぐ近くにある「楽山公園」も新たなフィールドとして加わり、子どもたちは電車に乗り楽山公園を目指します。その他、年に2回、ふれあいの森にて開催される森の整備委員会主催の森のイベントでは、普段その活動の様子を覗くことのできないお父さんやお母さん、弟や妹も自由に参加できる機会を設け、園が用意した昼食を食べながら、五感すべてを使って家族皆で1日たっぷりと遊ぶ日があります。

3歳で入園して約半年が経ってから子どもたちは初めて、ふれあいの森での時間を体験します。最初は森の雰囲気を怖がり、足元が覚束ない子やボーッと立ち尽くしてしまう子もいますが、大学生のお兄ちゃんやお姉ちゃんが同じ空間にいることで少し心が和んでいる様子。「この緑の葉っぱと茶色の葉っぱ、どっちがよく燃えるかな～」などといった、学生や大学の先生の誘導もあり、子どもたちは、あっという間に自ら遊びを見つけるようになっていきます。森に転がる大きな丸太は大型バスに、落ち葉が集まっている場所はプールに…いつの日からか子どもたちにとってこの森は、宝の山になっていくのです。

大学生のお兄ちゃんお姉ちゃんと過ごす森での時間は、子どもたちだけではなく、そこに居る全ての人にとって特別な時間

僕だってできるもん!

彼のクラスは全員で17人。自由時間になると、教室で鬼ごっこをする子やお絵かきをする子、歌を唄う子など、子どもたちは各々の時間を過ごします。その中で、1人教室をウロウロ歩く男の子がいました。それが彼です。普段の活動の中でも、彼がお友だちと会話をする姿はほとんど見られません。決して話せないという訳ではなくて、私たち大人とは控えめではありながらも上手に会話ができる子でした。入園して半年が過ぎても、その子に目立った変化は見られず、担任も気にかけていた頃のことです。本園の恒例である、ふれあいの森での活動が始まりました。初めて訪れた時は、園での様子と大きな違いを感じられなかったのですが、回数を重ねていくうちに、彼が大学生と会話をしている姿が見られるようになったのです。たわいも無い日常を大学生に話しているその子の様子を初めて見た時、「この子ってこんなに喋れるんだ!」と衝撃を受けたのを覚えています。その後、年中、年長へと進級した彼は、森での活動になると、活動終了時間ギリギリまで遊び、集合場所へは一番最後に戻って来る子になりました。

年長児最後の森の活動日、落ち葉の中に大きな箱が埋まっているのを見つけた彼は、「1人じゃ無理だ〜」と呟き、「誰か手伝って〜!!」と大きな声で仲間を集めました。そこに何人かのお友だちが集まり、土や落ち葉に埋まった大きな箱を掘り起こす作業を進めます。体格の大きな子が近くを通ると声をかける様子も見られました。想像していたよりも遥かに大きかったその箱を掘り出すことはできなかったものの、この子たちが過ごしたその時間には、大きな価値があると感じています。子どもたちにとって、空間の中で周囲の様子を伺っている時間も決して無駄ではなく、大切な時間であるということ。私たちに彼がそう教えてくれたような気がします。

森の中で大きな箱を見つけた彼の目はキラキラと輝いていました

皆をグルグル巻き込んで

本園の自然体験活動は、大学生と共に活動するという大きな特徴を持っています。それだけではなく、大学の先生や行政機関の人々、そしてもちろん子どもたちのご家族と共に過ごす森での時間が多いことも特徴と言えるでしょう。1回約2時間の森での活動を子どもたちは「早く森で自由に遊びたい〜！！」と心待ちにしています。活動を始めた当初は、雨の日も森へ出かける私たちの行動をなかなか理解して貰えず、お休みする子も少なくありませんでした。しかし今は、森の活動の日にお休みする子の方が通常保育の日より少ないようにも感じます。美味しいご飯と自然の中の自由な遊びがあれば、子どもたちは元気になるのだと思います。

INFORMATION

社会福祉法人ふれあいの森 東桂保育園
ヒガシカツラホイクエン

ふれあいの森での活動について 高田 研さんに聞く

思想家ヘンリーソロー（1817～1862）の研究者である今泉吉晴先生（本学名誉教授）は次のように言います。

「ソローにとって森の生活は、輝く太陽のもと、まぶしくて見えない楽園でした。世間の評価の高いハーバード大学の学問は役にたたず霧散していくのが分かりました。まぶしさになれるにつれ、森が開いて見せる世界にふれ、新たなものの見方が身についてくるのが分かりました。」日本環境教育学会30周年記念講演会（北杜市2019年8月24日）

ソローが既存の科学や思想から抜け出そうと試みたように、幼児への様々な「教育」という名前で、大人の企みの中に絡め取られていく子どもたちの「遊び」を救い出し、純粋な遊びの有用性を示していくことが園児との関わり方のテーマでした。「純粋な遊び」とは教育の目的に回収されない遊びのことです。

倒れた大木の根が恐竜に見え、倒木がジェットコースターとなり、森を走る不思議な世界です。妄想の中に入り込み〝夢中〟になること。古の日本では「7歳までは神の内」と言いました。宮崎駿は現代人が忘れてしまった子供にしか観ることができない世界を「森のトトロ」で表現しました。

10年という時間の中で東桂保育園の先生たちと、そして学生たちと共に育てきた森の中での「時間と場所」のあり方を今回表彰いただき、我々も喜んでおります。

幼児教育は教育の原点です。卒業した学生は全国に帰り、小中高等学校の教員になります。今まさに文科省で取り組む〝自分の力で学ぶ事〟へのかかわり方や、そのために子供たちの言葉に耳を傾け、感動に寄り添い、共感するという基本的な教育コミュニケーションのあり方を学生たちは幼児とのかかわりから「身知る」ことができます。大学生にとっても貴重な学びの場です。森を真ん中に人々が繋がり教育の場となることを林野庁は「森林環境教育」と名付けました。このような実践が県下でたくさん広がっていくことを願っています。

Profile

高田 研さん

たかた けん

都留文科大学 地域社会学科特任教授 環境教育。兵庫、大阪で公立小中学校教諭、文科省職員、岐阜県立林業専修学校の教員を経て現職。地球温暖化防止全国ネット理事長。

06

この地で「生きる」を知る

裏山での活動

身延山久遠寺の門前町として古くから親しまれてきた身延町に大野山保育園はあります。本園は、「人との関わり"和"を大切に」を信念に、この地域で70年近く子どもたちと触れ合ってきました。平成27年から動き始めた本園の裏山自然保育に向けての活動。そこには、私たちが今まで気づけなかったことを教えてくれた、外部の人々との出会いがありました。目の前にある豊富な資源を活用することで見えてきた子どもたちの豊かな日常。ここでは、本園の裏山自然保育のはじまりをご紹介します。

この裏山で自然保育ができる?!

これまでも、園近くにある富士川の土手で芝滑りをしたり、大野山本遠時（ほんのんじ）の境内で遊んだりと、地域にある豊かな自然や文化に触れながら積極的にあそびを重視した保育に取り組んでいます。

しかしある時、「自然に触れることは生きること」、「生きる原点を教えてくれるのは自然である」と伝えている方との出会いがきっかけとなり、私たちは改めて今ある本園の自然保育について考えるようになったのです。時同じくして、町の事業の一貫として、裏山の竹林の整備がおこなわれていました。かつては、この裏山で地域住民が自然薯を掘ったり、地域の子ども達だけで山に探検に行ったりと地域とともに歩んできた山でした。近年鹿の姿が日常的に見られるようになり、農作物への被害やヤマビルの発生に近くに住む住民から不安の声も上がっていました。整備された裏山には、たっぷり日が差し、山の活動において一番懸念されていたヤマビルの被害もなくなりました。自然保育について学んでいた私たちは、他園の見学や合同研修会に参加し、外部の専門家とも幾度となく対話を繰り返しました。そんな中、外から本園を見つめてくれた方々が皆同じように口にしたのが「魅力的な山ですね」という言葉でした。園から現在の活動エリアまで登れるこの裏山で子どもたちと一緒に活動できる喜びに気づけたのは、多くの大人が関わり、その中で皆が真剣に子どもたちの未来を考えたから他ならないと思っています。

裏山活動が協調性を育てる

他園への視察、専門家による本園裏山の視察や整備に加え、保護者や私たちに向けた講演会の開催、地域ボランティアの皆さんの協力など、大人たちが学び始めてから3年弱、いよいよ子どもたちと一緒に裏山へ入る日がやってきました。Cooの森と名付けた裏山に、園を代表して私たちと共に頂上を目指したのは、当時の年長児約28名。平地で遊ぶ体験は普段からありましたが傾斜のきつい裏山では、体のバランスを崩しやすい上に、足底の使い方が分からずに、フラフラと歩く子がほとんどでした。2回目以降になるとしゃがんだり、手をついたりと自分自身で身を守る方法を見つけ出していきました。その中で私たちが気をつけたことは、見守るということ。ゆっくりでも登りたいと思う子は登るし、登らない・登れないと決めた子には無理強いせず一緒に山を降りました。山の活動の時は、できるだけ多くの職員が一緒に登ることに配慮しながら、週に1回のペースで活動を積み重ねました。その結果1ヶ月ほどで服や手の汚れを気にする子がいなくなり、全員が足底を上手に使い急な坂道も簡単に降りるようになったのです。

現在は、毎週月曜日の午前中が山の活動時間です。0〜5歳の全園児が、各々の場所で過ごします。秘密基地を作ったり、どんぐりや葉っぱでおままごとを楽しんだり、体と頭の全てで自然を感じている様子が伺えます。そして、この裏山活動を通じ、子どもたちが様々な展開を見せるようにもなりました。「山の秘密基地に時計を作りたい」や「鳥の巣箱を作ってみたい」、「犬を飼いたい」など、〝やりたい〟を言葉に出す子どもが増えたのです。そして、「やりたい」を形にするために自ら考え、行動に移す子が増えました。さらに、仲間と話し合う姿が頻繁に見られるようにもなりました。

1.初めて裏山の頂上を目指す子どもたちの様子。足底を上手に使うことができずにフラフラしながら歩きました。2.山での活動は全てが初めて体験することばかり。自分たちの暮らす町を頂上から眺める子どもたちの目はキラキラしていました

知るって大事

子どもたちは、裏山の頂上までの急な斜面を10～15分ほどで登ってしまいます。頂上からは、富士川が流れる姿やそこに架かる身延橋、そして運が良ければ身延線が走る様子を眺めることができます。2019年の12月には、3歳児が初めて頂上に登りました。「ゆっくり登るんだよ～」、「横歩きがいいよ」など年長児のアドバイスが山に響き渡るなんとも微笑ましい時間。頂上まで登りきった3歳児から漏れる「うわ～綺麗～」という言葉は、きっと湧き上がった本能から出る言葉だと思えるのです。

目の前にある自然に気づかせていただいた多くの方々との出会いに感謝し、これから先も本園の特色ある保育に位置付け、子ども達の生きる力とともにこの活動も大切に育んでいきます。大人も子どもも同じように、いつの時代も「素直に学ぶことが大切」なのだと思います。

INFORMATION

認定こども園 大野山保育園
オオノサンホイクエン

裏山での活動について 佐藤 洋さんに聞く

この地で「生きる」を知るために園舎裏山での自然資源を生かした活動展開を試みている。鬱蒼と繁茂した孟宗竹林とセンダンの樹木を整備し、ヤマビルの生態研究を行い、ヒルの増加は森の不手入れであることを学び、知識と経験値を深める契機となった。特に正解なる森での活動はない。大切なのは子どもたちの社会位置における成長の現状把握、養育事情、園運営状況、森林形態の分析・植生調査から資源を生かした整備計画が活動の軸となっている。

活動の軸を支えているのは、地域資源の代表格「人材（地域ボランティア）」である。このヒューマンパワーは子供たちの価値観を育み、「生きる」を知る重要な要素であり、山での体験を経験値に変えることにつながるものとなる。園はマネジメント機能を有していて、保育士・身延町森林組合・山梨県峡南林務事務所・五感研究所・園保護者会・都留市役所博物館学芸員・ヤマビル・二ホンシカ・すべての昆虫・歴史などが整備委員会を構成している。サポーターとして、都留市開地保育園園長などが存在している。今後も園の自然資源を生かした保育活動に賛同または共感する人々の渦が、山梨県の周縁の一つ、大野山に共鳴していくこととなる。

この地域はフォッサマグナ（大地溝帯）と糸魚川－静岡構造線であり、一帯のほとんどは静川層群といわれほぼ南北の方向に延び、礫（れき）岩を主体とし砂岩・泥（でい）岩などから構成されている。礫岩は硬質であるので富士川に急斜面をむけ特異な急峻な地形をつくっている。活動場所も例外なく斜度は20度～25度はある。地肌から岩はむき出し、一歩間違えなくとも転げ落ちてしまうほどの傾斜である。84％もの森林面積を誇る木々がその山の地滑りを抑えているともいえる。

斜面は子どもたちにとって、魅力的な場所であり、困難な場所でもある。神経、体感、足裏でバランス感覚をフルに活用し、上り下りをナチュラルにこなすと同時に思考・判断力も培われる。そして、自分たちの町を見下ろす山の中腹におどりでれば自分達のやってみたいを実現させてくれ、没頭する機会を提供してくれている。

最上級のハザード・リスクマネジメント対策、最小限の言葉がけ、子どもたちや山の観察を行い、保育士も園児も「やってみたい」を経験し、好奇心を持続できる保育環境があることで、社会的寄与の部分を形成している。生きるを教えてくれる山や急斜面が身体の育ちを促すだけでなく、ひっそり隠れてじわじわと心のパーツ（感情・協調・自己肯定・規律・規範・創造）をひとつひとつ紡いでくれている「知」と「地」がここにある。

Expert 06

Profile

佐藤 洋さん

さとう ひろし 通称 ぱんちょ

所属：山梨県都留市役所産業課　都留市宝の山ふれあいの里ネイチャーセンター博物館学芸員、動物行動学（専門）。森林環境教育に力を注ぎ、植樹から伐採、製材加工、小屋づくりに至るまでのプログラムを展開している。子どもたちは没頭できるプロセス課程を大切に、保護者には子どもの観察・感察が重要であると日々唱えている。

自然体験活動を充実させたい
保育所、幼稚園、認定こども園へ

自然体験活動の
アドバイザーを派遣しています!

山梨県では、自然体験活動に関する安全対策や保護者への理解の深め方などを、アドバイザーを派遣して相談や実践指導を行なっています。子どもたちや保護者、保育や教育に携わる全ての人が楽しみ、共に成長できる充実した体験活動の実施に向けた良い機会。ぜひ積極的にアドバイザーをご活用ください。

アドバイザー派遣の利用には、
「県子育て支援局子育て政策課」への
申請が必要となります。

発行・問合せ先

山梨県子育て支援局
子育て政策課 子育て支援担当
☎ 055-223-1456

デザイン・編集　anlib株式会社